



©Più Luce per Orchestra Rai



KCOに指揮デビュー

マクシム・パスカル

紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)の2022年度は新首席指揮者就任と同時に、いま注目を集める指揮者2名が初登場する年だ。ひとりは7月の第131回定期で日本デビューしたアントニエッロ・マナコルダ。そしてもうひとりが23年2月の第133回定期を指揮するマクシム・パスカルである。

マクシム・パスカルのキャリアづくりやレパートリーはまさに“ユニーク”。その活躍は学生時代に遡る。ピアノやヴァイオリンを学んだ後、2005年にパリ音楽院に入学し、作曲、楽曲分析、オーケストレーションを学び始めるも、指揮の素養を必要と感じ、フランスソワ・グザヴィエ・ロトに師事。そして在学中の08年、同音楽院在学中の友人とアンサンブル『ル・バルコン』を結成し、活動を開始した（この団体名はジャン・ジュネの戯曲に基づく）。在学中のアンサンブルを組むのはとりわけ珍しくもなく、ごく普通のこと。しかしそのメンバー構成が濃い。演奏者だけでなく、3名の作曲家やサウンド・エンジニアらをも含

んでおり、先進的な音響・照明システムを取り入れるなど実験的で刺激的な活動に取り組んだのだ。さすがにこの当時は彼らの話題が遠い日本に届くことはなかつたが、13年アテネで『ナクソス島のアリアドネ』や、14年にエトヴェシュの『ル・バルコン』などを上演した頃からちらほらと情報が入ってくるようになった。

日本でまだごく一部とはいえ初めてその名が認識されるようになったのは、やはりメツツマツハーハーが審査員を務めた2014年のネスレ・ザルツブルク音楽祭ヤング・コンダクターズ・アワードを受賞した時だろう。この時にカラーラータ・ザルツブルクと共に演、次いで8月には同賞の副賞としてグスタフ・マーラー・ユーティングト管弦楽団と共に演じザルツブルク音楽祭へのデビューを果たし、一気に活動が広がっていった。ザルツにデビューしたところどころでこちらも特に“ユニーク”なことではないが、パスカルはプログラムのセレクトで個性を發揮した。このカメラーラータ・ザルツブルクとの共演でモーツアルトとラヴェルに合わせたのが、



シュトックハウゼン《光 Licht》の《金曜日》カーテンコール(2022年11月パリ)。当公演には12月15日「明日への扉」に出演した湯川亜也子さんも参加。



© Marco Borggreve

ニコラ・アルトシュテット

今やパスカルの代名詞にもなってきたシユトックハウゼンだ。ザルツ再登場の17年は、ウイーン放送響を指揮しグリゼー、同じ年の冬にはスカラ座でシャリエーノの新作オペラの世界初演、さらに本格的にシュトックハウゼンの7作からなる大連作オペラ『光』ツイクルスに取り組み始めるといった具合で、この頃はいわゆる「一般的なオーケストラ・コンサートを指揮するのをなかなか聴けなかつたくらいである。

2016年のベルリオーズ音楽祭で演奏・録音された『幻想交響曲』もユニークだった。若手指揮者が試金石として『幻想』を指揮するのはよくあることだが、パスカルは違つた。同音楽祭の委嘱で仲間のアルチュール・ラヴァンディエが、弦管（含ホルン）各パート1名（ヴィオラと金管、サクソフォーンは複数）にピアノやMIDIキーボード、エレキギターなどによる室内オーケストラ用に編曲した版を採り上げ、驚かせたのだ。翌17年サン＝ドニ音楽祭でもル・バルコンのホルニストであるジョエル・ラスリがアレンジした室内オケ版マーラー交響曲第7番を採り上げていた。

このようなパスカルは現在もスタイルを変えず、ル・バルコンとはバッハからシュトック

ハウゼン、オペラなど様々な作品を演奏し、客演オーケストラでは比較的「一般的な」レパートリーを手掛け、今ではすべてのジャンルでその地位を確立しつつある（さらにはパリのノンプロ・オケ「アンプロンチュ」の音楽監督として、若き音楽家や音楽愛好家たちの育成にも力を注いでいる）。

ニコラ・アルトシュテット

2016年のベルリオーズ音楽祭で演奏・録音された『幻想交響曲』もユニークだった。若手指揮者が試金石として『幻想』を指揮するのはよくあることだが、パスカルは違つた。同音楽祭の委嘱で仲間のアルチュール・ラヴァンディエが、弦管（含ホルン）各パート1名（ヴィオラと金管、サクソフォーンは複数）にピアノやMIDIキーボード、エレキギターなどによる室内オーケストラ用に編曲した版を採り上げ、驚かせたのだ。翌17年サン＝ドニ音楽祭でもル・バルコンのホルニストであるジョエル・ラスリがアレンジした室内オケ版マーラー交響曲第7番を採り上げていた。

このようなパスカルは現在もスタイルを変えず、ル・バルコンとはバッハからシュトック

パスカルと日本

初の14日間待機をした指揮者

パスカルが初めて日本を訪れたのは2017年、オーレリー・デュポンやジエルマン・ルーヴェ出演で沸いたパリ・オペラ座バレエ団の来日公演で、東京フィルを指揮し日本デビューした。続いて19年の『金閣寺』と20年1月のオーケストラ・アンサンブル金沢、そしてコロナ禍となつたこの年の12月には外国人アーティストとしてほぼ初となる14日間隔離待機をして読売日本交響楽団と名古屋フィルハーモニー交響楽団を指揮。さらに東京二期会の要請に応え、そのまま滞在を延長し21年1月の『サムソン』と『デリラ』の代役を務め成功に導き、そのまま定期的に来日するようになっている。

シマード・デビューをKCOとの舞台で飾つてもらうはずだったが、残念ながら新型コロナウィルス感染症の影響で中止となってしまった。この第133回定期は、その時の計画が4年半越しでようやく実現するというわけである。実現が延びたために、不運中の幸いとして、ニコラ・アルトシュテットが共演として加わることとなつた。クレーメルがロッケンハウス音楽祭の後継者に選び、サロネンには新作を任されるなど、アルトシュテットも、いま最もアグレッシブかつクリエイティヴな活動をしている音楽家のひとりである。才人2名のKCOデビューと、彼らとの共演でまた新たな顔を見せるKCOにご期待いただきたい。

文／松本學（制作部プロデューサー）



紀尾井ホール室内管弦楽団

第133回定期演奏会

【出演者】

マクシム・パスカル（指揮）
ニコラ・アルトシュテット（チェロ）

【曲目】

フォーレ：組曲『マスクとベルガマスク』op.112
+ パヴァーヌ op.50
ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲第1番変ホ長調 op.107
ベートーヴェン：交響曲第4番変ホ長調 op.60

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

2/10
金
19:00

2/11
土
14:00

2023年度シーズン・メンバー

日本製鉄文化財団は若手演奏家の育成支援制度として「紀尾井ホール室内管弦楽団シーズン・メンバー」を設置しています。2023年度も3名が1年間定期演奏会に参加します。



橋和 美優
(ヴァイオリン)



登坂 理利子
(ヴァイオリン)



岡田 桃佳
(ヴァイオリン)

紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO) 新メンバーが入団

10月1日付でヴァイオリンの城戸かれん、ホルンの勝俣泰がKCOメンバーとして仲間入りしました。既に活躍中の二人、KCOにまた新たな風を吹き込んでくれることでしょう。どうぞご期待を！



城戸 かれん (ヴァイオリン)



勝俣 泰 (ホルン)